

太平記を読む会は、四月十六日、関西民放クラブの事務局で第一回例会を開きました。出席者は登録メンバー十三人の内、十名で、岩波文庫「太平記」の序を学んだあと、第一巻の主要ヶ所を座席の順番に声読。後醍醐天皇の即位から、倒幕陰謀の首謀者たちが処罰された「正中の変」までを難なく読み終え、順調なスタートとなりました。

◇この日輪読した第一巻の個所は次の通りです。

(一)後醍醐天皇武臣を亡ぼすべき御企ての事

善政からのスタート (p37~39)

三十一歳で即位した天皇は当初、楠葉・大津以外の閑所の廃止、飢人窮民の施行など、善政に励んだ。

＊楠葉 淀川東岸の湊町。古来、水運や土器生産などの商工業で栄える。この時期には、麴販売をめぐって石清水八幡宮直属の業者との抗争が絶えなかった。

(二)中宮御入内の事

寵姫に溺れ (p41~42)

天皇は中宮に仕えていた阿野廉子を寵愛し政務までおろそかにして傾城傾国の乱れ(長恨歌)を招いた。

＊後醍醐の后妃・皇子 皇室系図の中で比較的信用できるとされている「本朝皇胤紹運録」によると、皇子十七人、皇女十五人、計三十二人、その母二十人。異常に多いわけではなく、治世を称えられた延喜の醍醐帝も皇子女は三十九人、母は十四人を数える。

(三)土岐十郎と多治見四郎との謀反の事、付無礼講の事  
ヌードパーティで倒幕謀議 (p48~49)

天皇の近臣、日野資朝、俊基は公家、僧、武士らの同志と倒幕の謀議を重ねたが、薄着の美女を侍らせて遊飲する「無礼講」を装った。

＊花園上皇の証言 後醍醐に譲位した花園上皇の日記「花園天皇宸記」の元亨四年(1324)十一月一日条には、資朝、俊基らの無礼講の様子を「衣冠を着けず、ほとんど裸で、飲食、乱遊」と記されている。太平記の記述とも一致し、史実だったと見られる。

(四)謀叛露見の事

寝物語から漏れた陰謀 (p54~57)

倒幕陰謀に加わっていた土岐頼員は、寝物語の言葉に妻に怪しまれ、陰謀への加担を漏らした。妻は一族の危急を救おうと、父で六波羅奉行の斎藤利行に密告する。六波羅は、楠葉の騒動鎮圧の名目で在京の治安部隊を謀叛人土岐頼時、多治見国長の住宅に急派、両人は討ち死

にした。

＊武士の名前 土岐頼時の正式な名前は土岐伯耆守源十郎頼時。これを分解すると「土岐」は名字で、本拠とする土地の名前、伯耆守は幕府を通じて朝廷から与えられる官職名、「源」は土岐氏が受け継いだ姓で、彼の場合は清和源氏、「十郎」は兄弟の長幼の順を示す仮名(けみょう)、最後が元服時に名乗る本名で、諱(いみな)ともいう。名前は多くの情報を含んでいる。

(五)俊基資朝召し取ら関東下向の事

資朝、俊基を張本人として鎌倉に連行 (p64~65)

幕府は、日野資朝、俊基を謀叛の張本人と断定し、北条得宗家の被官、長崎泰光、南部宗直を上洛させて二人を逮捕した。鎌倉から朝廷への使いを東使といい、通常二人が派遣される。この時も東使兩人として上洛。

＊徒然草が語る資朝 権勢を誇る関東申次、西園寺実兼の反感を買って六波羅に連行される歌人の京極為兼を見て、資朝は「あな羨まし、世にあらん思ひ出で、かくこそあらまほしけれ」といった。反骨の公家、資朝の手柄を伝える吉田兼好の貴重な証言。

(六)主上御告文関東に下さるる事

天皇の告文におびえた鎌倉幕府 (p66~69)

天皇は幕府の手が及ぶ前に弁明のための公文を鎌倉に下す。幕府要人の二階堂道蘊は「天子が武臣に告文を下したためしがない。開くのは恐れ多い」と反対したが、得宗北条高時は無視して、斎藤利行に読ませた。すると俊行はにわかに血を吐いて死んだ。資朝は佐渡配流、俊基は赦免、天皇への追及はなかった。

＊二階堂出羽入道道蘊 幕府官僚として朝廷との交渉に活躍した能吏。建武政権でも重要ポストに登用されたが、陰謀の疑いで処刑された。



太平記の風景1

### 夢窓国師が作った永保寺の庭園

正中の変で討死した多治見国長の邸宅跡から徒歩約30分。禅の境地を示す